

ヒルデガルトとアウローラ・ロドリゲス・カルバジェイラ： スペイン第二共和国時代のある母娘を巡って

砂山 充子

はじめに

1933年6月9日、第二共和国時代のマドリード、ガリレオ通りのアパートで一人の若い女性が母親によって銃殺された。娘の名前はヒルデガルト¹。母親はアウローラ・ロドリゲス・カルバジェイラ。異常なまでに娘に執着する母親がみずから手で娘を殺害した事件だった。検死の結果、4発の銃弾は2発が左側のこめかみに、1発が心臓に、そして1発が右の下あごに打ち込まれていた²。検死に立ち会った医学生から情報を得たノーマン・ヘア (Norman Haire)³ は銃弾の1発は性器に打ち込まれていたとして、ハヴロック・エリス (Havelock Ellis)⁴ にこの事件は「性的な犯罪だ」と述べている⁵。しかし犯行の実行者は恋人ではなく、彼女の母親だった。銃弾の一発は性器に打ち込まれていたという点についてロサ・カルは人々の関心を集めるために作り出された話だっただろうと述べている⁶。

ヒルデガルトは母親アウローラの英才教育を受け、生後22ヶ月で文章が読めるようになり、4歳の時にはタイプをきちんと打つことができた。10代半ばにして、英語、フランス語、ドイツ語などの外国語を使いこなし、弱冠13歳で執筆活動を開始した。いくつもの新聞に記事を発表し、多くの著作やパンフレットを執筆していた。執筆活動だけでなく、講演会や政党での活動にも熱心に取り組んだ。

スペインでは1931年に第二共和国が成立し、女性の参政権が認められ、女性議員も誕生するなど、女性の地位は向上していた⁷。そんな中であっても、他の女性政治家や知識人女性とは、

¹ Hildegart スペイン語ではhを発音しないため、イルデガルトと発音される場合もあるが、本論文ではヒルデガルトと表記する。

² Valezuela Moreno, José, *Un informe forense: el aseninato de Hildegart visto por el fiscal de la causa*, Madrid, Maricel, 1934. pp.54-55. Valenzuela はアウローラの裁判での検事。

³ オーストラリアの性科学者。シドニー大学の Norman Haire Collection に所蔵されているエリスとの書簡 Norman Haire Collection 3.16 にはヒルデガルトに関する言及がある。いくつかの書簡は British Library Havelock Ellis Papers に同じものが所蔵されている。

⁴ イギリスの性科学者。優生学の支持者で性改革世界連盟の代表の一人であった。

⁵ *Havelock Ellis Papers*, British Library Manuscript 所蔵. folio 64. 日付は1933年5月16日となっているが、正しくは6月16日。

⁶ Documentos RNE “Aurora Rodríguez y su hija Hildegart: el asesinato de la mujer moderna” 2011年12月3日放送のスペイン国営ラジオ番組。RNE ホームページから podcasting で聴取可能。
<http://www.rtve.es/alacarta/audios/documentos-rne/documentos-rne-aurora-rodriguez-hija-hildegart-a-sesinato-mujer-moderna-03-12-11/1264483/> 2011年12月1日最終アクセス。

⁷ 第二共和国下での女性を巡る状況については、拙稿「スペイン第二共和国 政治・女性・宗教を巡って」

世代や受けてきた教育も全く異なるヒルデガルトの存在は異彩を放っていた。女性の政治参加が実現した第二共和国という時代であったからこそより脚光を浴びることになった若いヒルデガルト。自らの計画通りにヒルデガルトを「制作」したアウローラ。第二共和国のもとで、掲げた目標が達成されるかと思われた時に起こったのが衝撃的な事件であった。「有名人」の少女が母親によって殺害されるという事件は人々の関心を集めた。新聞はこの事件を大きく報道した。裁判記録によると、母親アウローラは就寝中の娘を銃殺し、事件現場には争った形跡は皆無だった。殺害は計画的で、母親は数日前に自宅のテラスで銃の試し打ちをしていた。殺害の動機はヒルデガルトが母親のもとから自立しようと考えたことである⁸。

筆者はこれまで19世紀後半から1930年代スペイン内戦時代までの左派の女性を主たる研究対象としてきた。当時の新聞や雑誌でヒルデガルトの署名記事やヒルデガルト殺害事件の記事を目にするたびに一種の違和感を抱いていた。確かに、1920年代から1930年代には、それまでの女性とは違った生き方をした「新しい」女性たちが出現していた⁹。そうした女性たちには何らかの共通点があった。彼女たちは大まかに言って、世代としては40代以上で、リベラルな家庭に育ち、自由教育学院などの流れをくむ新しい教育を受け、自らの手で自分の人生を生きる道を切り開いた。例えば第二共和国下で国会議員となったクララ・カンポアモール (Clara Campoamor 1888-1972) や同じく国会議員をつとめ、刑罰制度の向上に尽力した法律家ビクトリア・ケント (Victoria Kent 1898-1987)、熱心な共和主義者でフェミニストでもあったカルメン・デ・ブルゴス (Carmen de Burgos 1867-1932) などがあげられる。彼女たちは「新しい女性 (モデルナス)」であった。彼女たちの間には運動組織やサロンのようなゆるやかなつながりの場があり、そうした場での様々な活動を通じて女性の地位向上に尽力していった¹⁰。ヒルデガルトも彼女たちと同じように女性への教育の必要性を説き、労働者の状況改善、自由な恋愛、性のコントロールなどを語っている。しかしマンジーニが指摘するように「彼女の社会主義に対するの考え方やフェミニスト思想はとても進歩的であった。しかし彼女自身はモデルナスではなかった」¹¹ と言える。ヒルデガルトは常に母親の監視下にあり、自分の人生を思うように生きることは出来なかったからだ。そして自分の人生を生きようと決意した途端に母親によって人生の幕を下ろされてしまった。

専修大学人文科学年報 38号、2008年3月を参照。

⁸ Valenzuela Moreno, *op.cit.*, pp.60-69.

⁹ こうした女性たちを「断髪」という切り口で分析した研究として、磯山久美子『断髪する女性たち—1920年代のスペイン社会とモダンガール』新宿書房、2010年がある。

¹⁰ スペインでは1931年憲法で女性の参政権が実現した。ただし、フェミニズムの立ち後れたスペインにあって女性参政権を支持するか否かは必ずしも女性の地位向上を目指すかどうかとは一致しなかった。ヒルデガルトも女性の教育不足、右派の勢力伸張を恐れて、1931年時点での女性参政権実現には反対していた。

¹¹ Mangini, Shirley, *Las modernas de Madrid: las grandes intelectuales españolas de la vanguardia*, Barcelona, Ed. Península, p.231.

ヒルデガルトは 13 歳で執筆活動を始めてから母親に殺された 18 歳までの短期間に、法学、文哲学の学位を取り¹²、さらに医学も学びながら、精力的な執筆、講演活動、政治活動を行なった。ヒルデガルトが特に熱心に取り組んだのが性問題の解決であった。ヒルデガルトは性について多くの著作を執筆し、1932 年 3 月に設立された性改革世界連盟 (WLSR : the World League for Sexual Reform¹³) スペインの支部設立の立役者となり、事務局長として責務を果たした。シンクレアは WLSR スペイン支部をヒルデガルトの「子供」と称している¹⁴。機関誌「セクス」(*Sexus*)¹⁵によると、ヒルデガルト母娘の自宅が事務局となっている。ヒルデガルトはバースコントロールによって人口抑制をするネオマルサス主義や避妊方法についてのパンフレットを著している。ハヴロック・エリスやノーマン・ヘア、H.G.ウェルズ、マーガレット・サンガーなどとも知己を得て、エリスとは何度も手紙のやり取りをしている。

しかし、10 代の若い少女にそんなことが可能であろうか？可能であったとすれば、彼女はどのような教育を受け、そうした知識を身につけたのであろうか。本稿はこれまでの研究成果をふまえつつ、この疑問点を明らかにすることを目的としている。

1 ヒルデガルトのリバイバル

1930 年代には多くの新聞に記事が掲載され、時代の寵児であったヒルデガルトの存在はしばらく忘却のかなたに置かれていた。彼女への関心が再び高まったのは、1970 年代後半にフランコ体制の終焉、フェミニズム運動の高揚と時期を同じくして彼女の作品が再版された時である¹⁶。1977 年にはスペインを代表する俳優にして監督のフェルナンド・フェルナン・ゴメスによって映画「我が娘ヒルデガルト」が製作され、ヒルデガルトの存在が広く知られることになった。この映画はヒルデガルト母娘と親しかったエドゥアルド・デ・グスマン (Eduardo de Guzmán)¹⁷ が

¹² ヒルデガルトは法学の学位をとったが、当時のスペインでは 21 歳になるまで弁護士としての活動は認められていなかったため、弁護士という肩書きを使っていることもあるが、実際には弁護士としての四 g とはしていなかった。

¹³ 優生学に基づく性改革を目指す組織。以下 WLSR と略記する。1921 年にベルリンで、1928 年にコペンハーゲン、1929 年にロンドン、1930 年にウィーン、1932 年にブルノで会議が開かれ、そのうち、コペンハーゲン、ロンドンでの会議については会議録が出版されている。Riese, Hertha & Leunbach, J.H. *Sexual Reform Congress, Copenhagen, 1.-5., VII, 1928 : proceedings of the Second Congress*, Levin & Munksgaard, 1929, Haire, Norman (ed), *Sexual Reform Congress, London, 8.-14., IX, 1929, World League for Sexual Reform : proceedings of the Third Congress*, Trubner, 1930.

¹⁴ この点については、Sinclair, Alison, *Sex and Society in early twentieth-century Spain: Hildegart Rodríguez and the World League for sexual reform*, Cardiff, University of Wales Press, 2007, Chapter 5 “Hildegart’s ‘child’: the Spanish Liga”を参照。

¹⁵ *Sexus* は 2 号までしか刊行されなかった。

¹⁶ Hildegart, *El problema tratado por una mujer española*, Madrid, Ediciones Morata, 1977. *La rebeldía sexual de la juventud*, Barcelona, Anagrama, 1977, *Medios para evitar el embarazo: paternidad voluntaria*, Zaragoza, Guara, 1978.

¹⁷ La Tierra 紙の編集主幹で、アナーキストのジャーナリスト、作家。フランコ時代にはアングロサクソ

書いた『血のアウローラ (Aurora de Sangre)』が原作である。オーストリアの作家エーリッヒ・ハックルはこの事件に興味を抱き、現地調査をもとに『アウローラの動機』¹⁸という小説を発表した。この本はベストセラーとなり、日本でも翻訳が出版された。劇作家ドミンゴ・ミラスは戯曲「アウローラ」を製作した。この作品は2002年、母娘が居住し、事件の現場でもあった家と同じガリレオ通りにある劇場で上演された¹⁹。

本論に入る前に先行研究を概観しておく。アウローラとヒルデガルトについての研究の先駆者はロサ・カルである。タイトルは『私は誰にも従わないーアウローラ・ロドリゲス その人生と作品 (ヒルデガルト)』²⁰である。「私は誰にも従わない」というのは、アウローラの言葉であるが、実際、アウローラはその通りに生きた。そして「その人生と作品 (ヒルデガルト)」というサブタイトルも意味深長である。ヒルデガルトはまさにアウローラの作り上げた「作品」であったからだ。スペイン内戦勃発の混乱の中で、刑務所から逃亡し、行方不明になったとされていたアウローラが実はマドリッド近郊の精神病院に収容されていたという事実が1980年代末に判明し、アウローラのその後の人生が明らかになった²¹。精神病院に残されていた資料がギジェルモ・レドゥエレスによって発見されたのだ。精神科医であるレドゥエレスはこの資料からアウローラの精神状態を分析した²²。

当初の研究は、事件の顛末や殺害の理由、アウローラの精神状態といった点、つまりどちらかと言えば、ヒルデガルトよりも母親のアウローラに関心が集まり、学術的というよりもジャーナリスティックな方法論での研究が主流だったが、近年になってヒルデガルトが書いた記事や講演録、著作などを分析の対象として、ヒルデガルトの政治思想の展開、性問題をめぐる見解などにフォーカスをあてた学術的な研究が出てきた。アリソン・シンクレアは20世紀初頭のスペインにおける性問題の改革や優生学の進展を分析するなかで、その中心人物の一人であったヒルデガルトを取り上げた。シンクレアは、それまでスペインの研究者が研究をした。それまでスペインの研究者が見落としていたヒルデガルトからイギリス人の性科学者ハヴロック・エリスへ送られた書簡を資料として用い、WLSR スペイン支部でヒルデガルトが果たした役割を分析した。ヒルデガルトからエリスに宛てた書簡はブリティッシュ・ライブラリーに

ン系のペンネームを用いて執筆活動を行っていた。ヒルデガルト母娘を一番身近で見ていた人物の一人である。

¹⁸ エーリッヒ・ハックル『アウローラの動機』クインテッセンス出版、1992年

¹⁹ http://www.elpais.com/articulo/madrid/Miras/recrea/asesinato/Hildegard/metros/ocurrio/elpepiatmad/20021203elpmad_19/Tes 2012年2月1日アクセス

²⁰ Cal, Rosa, *A mí no me dobléga nadie: Aurora Rodríguez Su vida y su obra (Hildegart)*, A Coruña, Edicions do Castro, 1991.

²¹ Fajardo, José Manuel, "Aurora Rodríguez, La tragedia de la Eva futura" *Cambio* 16, No.806, 11-mayo-1987, pp.130-136.

²² Rendueles Olmedo, Guillermo, *El manuscrito encontrado en Ciempozuelos*, Madrid, Ediciones de la Piqueta, 1989.

Havolock Ellis Papers としてバイディングされている²³。ヒルデガルトの政治信条の変遷を「大地」(La Tierra) 紙の記事の分析を中心として行なったのがロサーダ・ウリグエンである²⁴。カルメン・ドミンゴはそれまでの研究成果をふまえ、当時の新聞や刊行された二次資料を用いながら『愛しい我が娘、ヒルデガルト』²⁵でヒルデガルトの人生を紹介した。同書の巻末には、ハヴロック・エリスが執筆し、イギリスで刊行されたヒルデガルトを紹介する『赤い処女』²⁶ という小冊子²⁷ のスペイン語訳が掲載されている。カルメン・ドミンゴの著作の出版により、再び、彼女の存在に人々の関心が集まった。絶版となっていた前述のフェルナン・ゴメスの映画「私の娘、ヒルデガルト」が DVD となって再販となった²⁸。マリア・ヴァン・リュウは 1977 年という民主化移行期に撮影されたこの映画を母娘の関係性に焦点をあてて分析をしている²⁹。また、マルティネス・ロペス、フェレル・デルソは『ペピート・アウローラからヒルデガルトへ』という著作³⁰ で、デ・グスマンの著作を引用しながら母娘の人生をたどり、心理学的側面からこの母娘の関係を分析している。裁判ではアウローラの精神状態が一つの争点となった。アウローラは精神異常であったとされ、後に刑務所から精神病院に移送されそこで最期を迎えた。こうした研究の多様性からも想像できるようにこの母娘について研究を深めるには、様々な分野からの分析が必要であることを指摘しておく。

2 アウローラの作品「ヒルデガルト」

ヒルデガルトは母親アウローラの「作品」であった。アウローラは新聞広告を出して子供の父親を募集し、計画的に妊娠し、結婚せずにヒルデガルトを産んだ。ヒルデガルトの父親が誰であったかについては諸説ある。裁判記録には父親はイギリス人の航海士でヒルデガルトが生

²³ このバインダーにはヒルデガルトがエリスに送った手紙の他、エリスと他の人とのヒルデガルトに関する書簡、ヒルデガルトが送った新聞記事や、ヒルデガルトの死去を報道するイギリスの新聞記事などがまとめられている。このバインダーに収められている史料のうち、ヒルデガルトからエリスへの書簡はシンクレアの著作に所収されている。Sinclair, *op.cit.*, pp.163-216.

²⁴ Losada Urigüen, María, “El pensamiento político de Hildegart: entre socialismo y revolución”, *Germinal*, núm.2, Oct.2006.

²⁵ Domingo, Carmen, *Mi querida hija Hildegart*, Barcelona, Destino Libro, 2008.

²⁶ 人々は彼女を「赤い処女 la Virgen Roja」と呼んだ。この名前はヒルデガルトによると、青年社会労働党の集会の場で、マリアノ・ビジャブラナが「ヒルデガルトは我々の赤い処女だと紹介した」ことから広まったという。

Hildegart, “Cuatro años de militante socialista”, *La Tierra*, 3, oct.,1932.

²⁷ Havedock Ellis, “Red Virgen”, *The Adelphi*, July,1933. *The Adelphi* はイギリスの独立労働党系の雑誌。

²⁸ *Mi hija Hildegart*, Fernando Fernán Gómez, DVD

²⁹ Liew, Maria Van, “Defying the Past in Post-Franco Spain: The Interrogation of Aurora Rodríguez”, *Mosaic*, Univ.of Manitoba, Vol.36, tomo 3, Sept.2003.

³⁰ Martínez López, Francisco, Ferrer Delso, Ventura, *De Pepito Arriola a Hildegart*, Ferrol, Sociedad de Cultura Valle Inclán, 2006.

まれる前に死んだと書かれている³¹。デ・グスマンによれば「35歳の長身のたくましい男性で、アメリカ大陸への長い旅行からフェロルに戻ったばかりの男性だった。アウローラには航海士だと自己紹介したが、航海士でもあったが、同時に司祭でもあった。ただし、司祭といっても、当時のスペインの司祭とは全くことなる人物だった」³²という。ロサ・カルによれば、父親はアルベルト・パジャス・モンセニュー (Alberto Pallás Montseny) というリベラルな司祭だったという³³。カルはアウローラの部屋に残されていた品物の一覧表で AP というイニシャルと日付の入った金のペンを見つけ、航海士の名簿の中からパジャスを見つけ出した³⁴。現時点までカルの説を否定する見解は出てきていない。ただし実際の父親が誰であったのかは、この母娘の関係を考察する際にあまり問題ではない。この母娘にとっては、アウローラが法廷で述べたように父親は単に「生理学上の協力者 (colaborador fisiológico)」³⁵であっただけだからだ。

ヒルデガルトが、まわりの子供より早い時期に歩いたり、言葉が話せるようになったというのは、あくまでも母親アウローラが語ったことなので、真偽のほどは明らかではない。ただし、1932年1月にエリスへの手紙で彼女自身が「身長約170センチ、体重78キロ」³⁶だと述べているのでかなり立派な体格の少女であったことは間違いない。そして、ヒルデガルトが授業を受講していた大学教授で社会労働党の政治家のフリアン・ベステイロ (Julián Besteiro) も「学問的には本当にすばらしかった」³⁷とヒルデガルトの能力を絶賛した。アウローラは片時もヒルデガルトから目を離さず、どこに行くにも娘に同行した。大学の授業はもちろんのこと、インタビューでも同席し、講演会では最前列に座って彼女の講演を聴いていた。ヒルデガルトは常に母親に監視されていたと言える。

この母娘の关系到決定的な影響を及ぼしたのが、母親アウローラのそれまでの人生である³⁸。アウローラはスペイン北西部、ガリシア地方のエル・フェロルの豊かな家庭に生まれた。アウローラには6歳年上の姉ホセフィーナがいた³⁹。ホセフィーナは小児麻痺のため足が不自由だった。母親はホセフィーナの面倒ばかりみてアウローラを邪魔者扱いした。母親と顔を会わ

³¹ Valenzuela, *op.cit.*, p.44.

³² De Guzmán, Eduardo, *Aurora de Sangre*, Barcelona, Mundo Actual de Ediciones, 1978, p.61.

³³ Cal, Rosa, "Tras el padre de Hildegart", *Cambio 16*, No.1045, 2-12-1991, pp.125-6.

³⁴ カルの著作の巻末にはパジャスの執筆したカトリックに関する文章が所収されている。Cal, *A mi me doblaga nadie*, pp.209-214.

³⁵ Pérez Sanz, Pilar, Bru Ripoll, Carmen, "La Sexología en la España de los años 30 ,tomo II Hildegart o la historia de Aurora Rodríguez, su madre", *La Revista Española de Sexología* N.32, 1987, p.76.

³⁶ Letter from Hildegart, 5-Jan.-1932, Havelock Ellis Papers, folios 11-16,.

³⁷ Coca Medina, Gabriel, "Un parricidio intelectual en 1933 La muerte de la Virgen roja", *Tiempo de Historia*, 19-Junio-1976.

³⁸ アウローラの人生については精神病院に残されていた資料 "Manuscrito encontrado en Cienpuzuelos" による。Rendueles, *op.cit.*, pp.13-48.この部分は Domingo の著作にも再録されている。Domingo, *op.cit.*, pp.282-312.

³⁹ アウローラの姉、ホセフィーナについては Cal, *A mi me doblaga nadie*, p.27-30. に拠る。

せるのは食事の時だけだった⁴⁰。行き場所のなかったアウローラは法律家の父親の書斎に籠って書棚にあったオーエンやフリーエ、サン・シモンなど空想社会主義の著作を読みふけた。

ある日、姉のホセフィーナは未婚のまま子供を身ごもる。しかも父親は母親の愛人でもあった男性だった。当時のスペインで未婚の女性が出産するというのはスキャンダラスな出来事だったため、ホセフィーナは生まれたばかりの赤ん坊を当時16歳のアウローラのもとに残し、フェロルから去ってしまう。アウローラは16歳から20歳までの多感な時代を、自分をかまってくれなかった母親とその原因を作った姉ホセフィーナがほうっていった赤ん坊ペピートに愛情を注ぎながら送る。アウローラにとってペピートは「生きた人形」だった。アウローラは生涯を通じて人形にとっても固執していた。プレゼントは何がいいかと尋ねられると「生きた人形と答えていた」⁴¹という。アウローラは「ペピートが生まれたとき、天空が開くのを感じました。そう私はついにとっても欲しかった生きた人形を手に入れたのです。さらにその子は独身女性の子供だったのです」⁴²。

アウローラは当時、良家の子女のたしなみであったピアノを弾くことが出来た。ペピートを膝の上に載せて何度となくピアノを弾いていた。ある日、幼いペピートが突然、一度耳にしただけの曲を完璧に奏でた。そのとき、アウローラは自分こそが彼の奥底に眠っていたピアノの才能を引き出したのだと確信した。ペピートの才能は宮廷で演奏会を開催するほどに評判になり、一時ペピートは「スペインのモーツァルト」と呼ばれた。ペピートの神童ぶりが明らかになると、息子を捨てて出て行った母親ホセフィーナは突然、フェロルへ舞い戻ってきて4歳の子供をアウローラから取り上げてしまう。ペピートとの別れは彼女にとって堪え難い苦痛だった。アウローラは決心する。誰にも取り上げられることのない自分だけの生きた人形を持つと。アウローラはその人形を誰とも、たとえそれが子供の父親であっても共有したくはなかった。

アウローラは妊娠中からありとあらゆる方法で「完璧な作品」を「作り出す」ための努力を惜しまなかった。食生活に気を配り、壁には美しい絵画を飾り、戦争についての記事を読む事は避けた⁴³。子供には美しさと健康のインスピレーションを与えるような名前を考えた⁴⁴。書類上はカルメン・ロドリゲス・カルバジェイラと母親の名字の名前⁴⁵がつけられたが、一度もこの名前を使うことはなかった。ヒルデガルトが名乗ったのは名字なしの「ヒルデガルト」という名前のみである。「ヒルデガルト」とはドイツ語で「英知の園」という意味である。中世のド

⁴⁰ Rendueles, *op.cit.*, p.23

⁴¹ *Ibid.*, p.22.

⁴² *Ibid.*, p.23.

⁴³ アウローラがヒルデガルトを出産したのは1914年で第一次世界大戦のニュースが報道されていた。

⁴⁴ Havelock Ellis, "The Red Virgen", *Adelphi* July 1933 p.175.

⁴⁵ スペインでは父方の姓、母方の姓を組み合わせて子供の姓とするのが通常である。

イツの聖人ヒルデガルト・フォン・ビンゲン (Hildegard von Bingen) と綴りが混同されることもあるが⁴⁶ 無関係である。ヒルデガルトが産まれると「英知の園」という名前にふさわしい子供に育てるべく、英才教育を施した。ヒルデガルトは母親の 아우ローラが計画的に作り上げた「優生学的に優れた作品」⁴⁷ だった。ヒルデガルト自身も自分が「優生学的な子供 (eugenic child)」だと自覚していた。彼女がいかに早熟であったかのエピソードとして以下のような話がある。彼女は3歳の時にバラ (ロサ) が「両性具有」ということを学んだ。そこで家政婦の娘でロサという子供に向かって「ロサ、あなたは両性具有なのよ。」と語った。わけが分からずにいたロサにヒルデガルトは、巧みに「両性具有とは同時に男性と女性であるということなのよ」と説明をしたという⁴⁸。アウローラはペピートをピアノの前に座らせたようにヒルデガルトをタイプの前に座らせた。ヒルデガルトは4歳でピアノを奏で、タイプライターも打てるようになった。

アウローラはフーリエが提言したフィランステイエールを作りたいと考えていた。ある一つの使命を帯びた優秀な人々を集めて教育を施し、その後、そうした人々を通じて、理想の社会を作り上げるという具体的な計画を描いていた。生まれ故郷のフェロルではなく、マドリード郊外のアルカラ・デ・エナレスにそうした共同体を作ろうとしていた⁴⁹。しかし、父親の死や世界大戦のためその計画は頓挫してしまう⁵⁰。母親にはなりたいと思っけていても、妻になるのは、墮落だとすら考えていた。母親や姉に対する大きな失望もあったのだろう。一般の女性に対しては敵対心さえ抱いていた。

現代であれば、念入りに DNA を調査して優秀な精子を見つけ、男性と交わることなく、人工授精で子供を妊娠・出産したのであろう。アウローラはオーガズムを墮落と考え、快楽のためのセックスから生まれる子供は不健康であるとも考えていた。アウローラがこれほどまでに快楽を伴うセックスを嫌っていたのは、自らの体験が大きく影響している。アウローラの母親には愛人がいた。前述のようにペピートは母親の愛人とアウローラの姉、ホセフィーナとの間に生まれた子供だった。つまり、少女時代にアウローラは、母親と姉という性の快楽を求める二人の女性を目の当たりにしていた。近親憎悪からそうした気持ちが生まれたとしても不思議ではない。裁判ではアウローラの精神状態が問題とされ、その後の研究でもアウローラが精神

⁴⁶ 例えば、Liga Mundial para la reforma sexual, *Liberal*, 3-marzo-1932 では性問題改革世界連盟のスペイン支部の設立で、彼女の名前が挙がっているが、Hildegard と書かれているほか、スベルミスは新聞記事等でも散見される。

⁴⁷ 優生学とは「eugenesis 良い血すじを作る術 (eu 良い, genes 生まれ, ika 術、学) という学問で 20 世紀の初頭に世界の 30 カ国を超える国々で大流行した。現代では優生学というとナチスと結びついて考えられるが、当時はまだその以前の時代である。優生学については、マーク・B・アダムス著『比較「優生学」史』現代書館、1998 年が参考になる。

⁴⁸ Havelock Ellis, *The Red Virgin*, p.175.

⁴⁹ Rendueles, *op.cit.*, pp.28-29.

⁵⁰ De Guzmán, *op.cit.*, pp.40-41.

を病んでいたかどうかへの関心も高まったが、その点については、本稿の問題設定の範囲を逸脱するので今回は取り扱わない。

3 ヒルデガルトの作品

ヒルデガルトは短い生涯の間に精力的な執筆活動をした。1926年4月から1928年12月までは「セクシュアリティ (Sexualidad)」に記事を執筆している。同紙には、ヒルデガルトの執筆した記事の他に彼女に関する記事もたびたび掲載されている。この時期の記事は彼女の講演録のようなもので、シンクレアは彼女の記事を「大して興味深くも重要でもない。難解で言葉倒れの若者が書くエッセイに似ていて、彼女自身の生活とは(経験の上で)かけ離れすぎている」⁵¹と厳しい評価を下す。

ヒルデガルトは1928年13歳で中等教育を終了すると、翌1929年1月1日に社会労働党青年部 (Juventudes Socialistas) に加入し政治活動を開始した。アウローラの思想は社会主義よりも急進的なアナーキズムに近かったが、ヒルデガルトが政治活動の場として社会労働党を選んだのは、当時はプリモ・デ・リベラの下でアナキストに対する弾圧が激しかったという事情もある。1929年9月には全国大会で青年部の副代表に選出された⁵²。1932年10月に社会労働党と袂を分かつまで、社会労働党の機関誌「エル・ソシアリスタ」が執筆活動の中心となっていく。「エル・ソシアリスタ」には1929年2月から1931年8月まで記事を執筆している。

1931年4月14日、スペイン第二共和国が成立した。ヒルデガルトは第二共和国に大きな期待を抱いた。しかし、期待はほどなく失望へと変わる。共和国はあまりに多くの解決すべき問題を抱えていたため、農地改革、政教分離など掲げていた改革はほどなく頓挫してしまう。ヒルデガルトは社会労働党の中心人物たちの身内びいき (socialenchufismo : social + enchufar 「お互いに結びつく」という言葉をあわせた造語) や1931年末から1932年頭のカスティルブランコやアルネードでの労働者と治安警備隊との衝突に対する共和国政府の対応に失望し、次第に批判のトーンを強めていく。労働者や組合の利益より、党の利益を優先する社会労働党の姿勢に我慢が出来ず、ついに社会労働党からは離れ、共和主義政党 (Partido Republicano Democrático Federal) へと活動の場を移す。『マルクスは間違っていたのか・・・?』⁵³ という大部の著作と「なぜ私は連邦主義者なのか?」⁵⁴ という記事を発表し、社会労働党と決別し

⁵¹ Sinclair, *op.cit.*, p.49.

⁵² Losada Urigüen, p.73.

⁵³ Hildegart, *¿Se equivocó Marx...?*, Ediciones Boro, Madrid, 1932. 本書は400頁の大部の著作である。

⁵⁴ Hildegart, "Por qué soy federal", *La Tierra*, 7-junio-1933.

た。『マルクスは間違っていたのか・・・?』では、本文の後に「社会労働党と UGT へ」というメッセージが掲載され「この本の出版ともに、私は社会労働党と UGT から脱退する」⁵⁵と宣言している。党にいらなくなるほどの政治批判を 10 代の少女が行うことは可能だったのだろうか。ここでも、母親アウローラの大きな影響力があったと思われる。社会労働党から離党後、執筆活動の場も急進的でアナーキスト寄りの独立系新聞「大地」(La Tierra) 紙へと移っていく⁵⁶。

新聞には各地で開催された講演会でのヒルデガルトの人気の高さが報道されている。会場は講演開始前から満杯になり、講演の後、拍手が何分も続いたなどといった記事がしばしば掲載されている。ヒルデガルトが重要視し、熱心に取り組んだのが性問題の改革である。1933 年 4 月 21 日から 5 月 10 日までマドリッドで開催された「第一回スペイン優生学会」では「自覚ある母性」というタイトルで講演を行った⁵⁷。肩書きは弁護士、宣伝家、WLSR スペイン支部事務局長となっている。まず、マルサスの理論を紹介し、バースコントロール⁵⁸の必要性を説き、その方法をきわめて具体的に紹介している。性問題に関連する著作は多く、『優生学問題を前にした近代女性 (Una mujer moderna ante el problema eugénico)』(1929 年)『あるスペイン女性による性問題 (El problema sexual tratado por una mujer española)』(1931 年)『若者の性反逆 (La rebeldía sexual de la juventud)』(1931 年)『マルサス主義とネオマルサス主義 (Malthusismo y Neomalthusismo)』(1932 年)などを出版している。数百頁に及ぶ大部の著書の場合もあれば、パンフレットのような場合もあった。本の売れ行きがよく、出版社からさらに著作を書くようにと依頼されていることがヒルデガルトからエリスへの手紙で語られている⁵⁹。

ヒルデガルトと第二共和国時代の政治家たちやフェミニスト運動の担い手たちとの関係はいかなるものだったのだろうか。カルによれば、ヒルデガルトとクララ・カンポアモールとはとてもよい友人だったという。しかし、アウローラはカンポアモールのことを嫌っていたという⁶⁰。ただし、母親の監視下で生活していたヒルデガルトには友人と自由に過ごす時間は与えられなかった。は幼い時から昼も夜も勉強、もしくは仕事に明け暮れる日々を送った。裁判記録の中にマティルデ・ウイシ (Matilde Huici, 1890-1965、弁護士) やクララ・カンポアモールとヒルデガルトとの関係をうかがわせる記述がある。裁判で検事が「ウイシ氏やカンポアモール氏

⁵⁵ Ibid., p.393.

⁵⁶ ヒルデガルトの政治的軌跡については Losada Urigüen, *op.cit.* を参照。

⁵⁷ 講演録は "Maternidad consciente" として以下に掲載されている。Noguera, Enrique y Huerta, Luis, *Genética, eugenesia y pedagogía sexual: libro de las primeras jornadas eugénicas españolas*, pp.203-244.

⁵⁸ スペイン語ではなく、英語の「バースコントロール」という言葉をそのまま用いている。

⁵⁹ Letter from Hildegart, 5-Jan.-1932, Havelock Ellis Papers Folios 11-16.

⁶⁰ Cal, *A mi me doblaga nadie.*, p.91

から、もう少しお嬢さんを自由にさせてあげたらどうですかと言われたことはないですか？」との審問をしている⁶¹。証言台に立ったウイシは「被告（アウローラ）は精神的に娘を抑圧していました。娘を自分の所有物のように考え、自分が実現できなかったことをすべてやらせようとしていました」⁶²と証言している。どの程度親しかったかは別として、カンポアモールやウイシと何らかのつながりがあったことは確かである。

性科学の分野では、グレゴリオ・マラニョン（Gregorio Marañón, 1887-1960）⁶³を尊敬し、彼の著作から多くのインスピレーションを得たと述べながら⁶⁴も、時には彼を含む知識人たちを保守的すぎると批判もしている⁶⁵。

ヒルデガルトはエリスへの手紙で、カンポアモールを含む第二共和国の議員について批判的に語っている。名前があがっているのは、アルカラ・サモラ大統領、ラルゴ・カバジェーロ労働大臣、マヌエル・アサーニャ、カサレス・キローガ、マルセリーノ・ドミンゴ、ビクトリア・ケントといった第二共和国時代の中心的な政治家や、劇作家でアサーニャの義兄弟であるリバス・チェリフなどである。彼女は政治がうまくいかないのは、彼らが同性愛者であるからと述べている。結婚しているアサーニャに子供がいないのは、彼が義兄弟のリバス・チェリフと特別な関係にあるからだと語る。アルカラ・サモラとラルゴ・カバジェーロを主人公にして『クオ・ヴァディス、ブルジョアよ』⁶⁶という小説を執筆し、エリスに送ったこの本の裏表紙にはアルカラ・サモラとカバジェーロが主人公であることがヒルデガルトによって手書きで追記されている。ヒルデガルトはエリスに多くの新聞の切り抜きを送っているが、それらには様々なメッセージが書き添えられている。アサーニャについては「彼は醜いでしょう？彼は義兄弟のカサレス・キローガやスルエタ、マルセリーノ・ドミンゴと関係がある」⁶⁷と書き、アルカラ・サモラについては、「(彼は)ラルゴ・カバジェーロの友人、監獄での事件（投獄されていたアルカラ・サモラとラルゴ・カバジェーロが真夜中に二人で独房にいたということ）⁶⁸を覚えているでしょう？」⁶⁹と念を押し、ルイス・デ・スルエタの写真には「もう一人のアサーニャの恋人、最近、大臣に昇格」⁷⁰とのコメントが加えられている。

⁶¹ Pérez Sanz y Bru Ripoll, *op.cit.* p.73.

⁶² *Ibid.*, p.94.

⁶³ 内分泌専門の医師で WLSR スペイン支部の代表を務めていた。

⁶⁴ Hildegart, *El problema sexual tratado por una mujer española*, Madrid, Ediciones Morata, 1931はグレゴリオ・マラニョンに捧げると記されている。

⁶⁵ Letter from Hildegart to Ellis, 23-Oct.-1931. Havelock Ellis Papers, folio 4.

⁶⁶ Hildegart, *¿Quo vadis, Burguesía?*, Madrid, Edición Novela Proletaria, 1932.

⁶⁷ Havelock Ellis Papers, folio 104.

⁶⁸ 監獄での事件とは投獄されていたアルカラ・サモラとラルゴ・カバジェーロが真夜中に二人で独房にいたということ。Letter from Hildegart 5-Jan.-1932, Havelock Ellis Papers. Folios 11-16

⁶⁹ Havelock Ellis Papers, folio 105.

⁷⁰ Havelock Ellis Papers, folio 109.

彼女がどういう動機からこうした批判を行ったのかは不明である。考える理由は大きな期待を抱いていた第二共和国の指導者たち、特に社会労働党の政治家への不満をこうした形で表したということである。もしくは「優生学」の視点から、同性愛は好ましくないと考えていたのかもしれない。母親のアウローラは同性愛についてきわめて否定的な見解を抱いていた。しかし、この点は彼女が立役者でもあった WLSR の綱領と矛盾する。綱領では男女の政治、経済、性的な平等、バースコントロール、優生学に基づく人種の向上、売春の禁止、性病の予防などが唱われているが、第 6 条に性的に逸脱した人々、特に同性愛の人々に対しての理性的な態度を持つという点が掲げられている。

ヒルデガルトの性問題に関する著作を分析すれば、彼女の性的マイノリティに対する見解がもう少しはっきりするのかもしれないが、その点については、今後の課題としていきたい。ただ、こうした側面が、記事や講演会では表面に出てこない 10 代の少女の本音だったのかもしれないと推測される。師として尊敬しながらも、親しみを抱いていたエリスに思いのままを綴ったとも考えられる。

4 スペインの天才少女

スペインに天才少女がいるという話は、当時のヨーロッパやアメリカで活動をしていた性問題の専門家たちにネットワークを通じて伝わっていった。ヒルデガルトはエリスやサンガーに手紙を出している。Havelock Ellis Papers にバインディングされているエリス宛のものは一通のみがスペイン語で、それ以外は英語で書かれている。エリスへの英語の手紙にはかなりのスペルミスや文法的誤りなども散見され、英語を完璧にマスターしていたとは思えないが、そういった点を補って余ある勢いがある。エリスへの手紙はかなり長いものが多く、自らのポートレイトを送ったり、エリスの写真を送って欲しいと依頼もしている。

ヒルデガルトはサンガーとも書簡のやり取りをしていた。マーガレット・サンガーは当初、ヒルデガルトから届いた手紙をやりすごしていたが、その内容を読み、なおかつ、エリスとのやり取りをする中で、ヒルデガルトが性問題について、いかにたくさんの成果を出してきたのを知り、次第に彼女を評価するようになっていった。サンガーとヒルデガルトのやり取りは、Margaret Sanger Papers に残されている⁷¹。ヒルデガルトからの 1931 年 10 月 23 日付けの手紙が届いたとき、サンガーはよくある若い少女からのアドバイスを求める手紙なのだと思って

⁷¹ “Sanger and the Red Virgin,” Margaret Sanger Papers Project, *Newsletter*, #30, Spring 2002. http://www.nyu.edu/projects/sanger/secure/newsletter/articles/sanger_and_red_virgin.html 2012 年 2 月 10 日最終アクセス

いた。しかし、手紙には「私は 16 歳、スペイン人。まだ若いけれど今年 9 月に法学部を終了し、今は哲学と医学を学んでいます。」と書かれ、さらに性改革についての著作を 2 冊、小冊子を 3 冊出版したと書いてあった。そして、サンガーからのアドバイスを求めている。サンガーはヒルデガルトに参考文献リストを同封した短い手紙を送った。その間、サンガーはエリスからの手紙でヒルデガルトについて知る。エリスは「スペイン人弁護士の少女は世界の驚嘆すべき人物の一人」だと賞賛した。そしてヒルデガルトが「2 歳で文章が読め、13 歳で大学に行き、5 カ国語が話せ、9 冊の本を出版している」ことを伝えた⁷²。1932 年 1 月にはサンガーのもとにヒルデガルトから 2 通目の手紙が届き、ニューヨークのサンガーのクリニックや避妊方法についてのさらなる情報を求めている⁷³。このサンガーとのやり取りの中でもアウローラの大きな影響力を示唆する部分がある。「母はあなたの著書（『私の産児制限への戦い』）を何度も読んで、あなたに敬服しています」⁷⁴。ヒルデガルトのバースコントロールの知識はアウローラがサンガーの著作から得た知識だったということも十分考えられる。アウローラは辞書があれば、英語とフランス語が読めたことは、後に刑務所を訪問したジレット・ギャティがエリスに知らせている⁷⁵。

SF 作家の H.G. ウェルズ⁷⁶ はマドリッドの訪問時にあらゆるインタビューは断っていたが、ヒルデガルトと母親とは面会をし、ヒルデガルトに彼の秘書としてロンドンに来るようにと勧誘をした⁷⁷。アウローラは娘のイギリス行きに反対した。一時たりとも「作品」を自分の手元から離したくなかったからである。アウローラはイギリスの諜報機関がヒルデガルトを利用しようとしていると考えた。イギリスの諜報機関が彼女を利用しようとしているというのはエリスの切り抜きにあるイギリスの新聞でも報道されていたが、あまり信憑性はないだろう。

WLSR スペイン支部ではヒルデガルトはマラニョンを支えて活動をしていた。というよりも、エリスへの手紙から判断すると、ヒルデガルトが実質的に組織を動かす立役者だったようである⁷⁸。ここでも大きな疑問が浮上する。19 世紀後半から 20 世紀にかけて、スペインの科学界が反フェミニズムの旗ふりをしていたという点はスペイン女性史の先駆的著作でスカンロンも指摘している点である⁷⁹。そのような科学界のメンバーがいくら進歩的な人々であったとして

⁷² Ellis to Margaret Sanger, Dec. 11, 1931, *Ibid*.

⁷³ Hildegart to Sanger, Jan?, 1932, *Ibid*.

⁷⁴ Hildegart to Sanger, March?, 1933, *Ibid*

⁷⁵ Letter from Gillet-Gatty to Ellis, 11-Aug.-1933, Havelock Ellis Papers, folios 75-76.

⁷⁶ ウェルズは一時期、サンガーと恋人関係にあった。ヒルデガルトについては、エリスから情報を得たのかもしれないし、サンガーからだったかもしれない。

⁷⁷ Cal, *A mi me doblaga nadie*, p.136.

⁷⁸ 性改革スペイン協会の活動については Sinclair, *op.cit.* の Chapter 5,6, を参照。スペインの優生学については、千葉淳子「スペインにおける優生学と女性—第一回スペイン優生学大会講演論文集から—」『スペイン史研究』15号、スペイン史学会、2001年10月、1-15頁を参照。

⁷⁹ Scanlon, Geraldine, *La polémica feminista en le España contemporánea, 1868-1974*, Madrid, Akal,

も、若い女性を自らの組織の中心メンバーとして、抵抗なく受け入れたであろうか？マラニョンはヒルデガルトについてはどう考えていたのだろうか。シンクレアによれば、WLSRの活動方針を巡って、ヒルデガルトとマラニョンの間にはいくつかの行き違いもあったようである⁸⁰。カプデビラ・アルグエジェスはラモン・イ・カハル⁸¹がアンパロ・ポク・イ・ガスコン⁸²について何も述べていないのと同様に、マラニョンもヒルデガルトについて何ら言及していない点につちえ、彼らが彼女たちを男性の弟子と同等には考えていなかったからではないかと、彼らのミソジニーにその理由を求めている⁸³。ただ、この点については、マラニョンの回想録や書簡を詳細に検討してみる必要がある。

5 ヒルデガルト＝アウローラ？

ヒルデガルトはアウローラの操り人形だった。アウローラは操り人形が言う事を聞かなくなったから殺してしまった。アウローラはヒルデガルトを殺したことを後悔していない。「私はヒルデガルトを殺してよかったと思います。この世の中で生きていくにはすばらし過ぎたから」と語った⁸⁴。

はたして、ヒルデガルトの著作、記事を書いたのは誰だったのか？講演の草稿を書いたのはヒルデガルト自身だったのだろうか？ヒルデガルトは確かに優秀な少女だった。同世代の少女たちのような自由な時間は彼女には与えられなかった。母親からいつでも勉強や仕事をするように命じられていた。同級生の母親によると、アウローラは些細なこと、例えば、ノートを忘れたり、鉛筆をなくしたり、エプロンにインクのシミがついていたり、ということでも、ヒルデガルトを叱りつけていたという⁸⁵。ヒルデガルトはその名前が示すように「英知の園」を実現するためにアウローラによってこの世の中に生み出されたわけであるから、そのように生きなければならなかった。

1931年に発行され、スペイン国立図書館に所蔵されている『性教育』⁸⁶には「アウローラ・ロドリゲス・カルバジェイラ」のサインがある。フェルナン・ゴメスの映画にもヒルデガルトが母親にこれは「私たち二人の作品」だからとサインするよう懇願する場面があった。

1986. 第4章 pp.159-194 を参照。

⁸⁰ Sinclair, *op.cit.*, pp.96-97.

⁸¹ スペインの脳科学者。1906年にノーベル生理学・医学賞を受賞している。

⁸² 1936年から活動をしたアナーキスト系フェミニスト組織ムヘレス・リプレスの創設メンバーの一人で医者。

⁸³ Capdevila-Arguelles, Nuria, *Autora inciertas*, pp.199-200.

⁸⁴ Cal, *A mi me doblaga nadie*, p.137.

⁸⁵ “Martirio y Muerte de Hildegat”, *Crónica*, 12-junio-1934, Havelock Ellis Papers Folio 138.

⁸⁶ Hildegart, *Educación Sexual*, Madrid, 1931.

1931年12月「エル・ソシアリスタ」紙第一面にヒルデガルトへのインタビュー記事⁸⁷を発表したコカ・メディーナは自宅に招かれた。このインタビュー記事というのが、質問を送りそれに回答を寄せてもらい、なおかつ写真も同封してもらうという形だった。それがあたかも実際にインタビューを行ったかのような紙上で再現された。こうしたケースは他にもあったのではないかと推測される。インタビューが掲載された後、コカ・メディーナはガリレオ通りの自宅を訪問し、アウローラ／ヒルデガルト母娘と面会する。社会労働党内で彼女に対する敵対心がある中、彼女へのインタビュー記事を執筆した真の目的は何だったのかと訪ねられた⁸⁸。訪問の間、話をするのはアウローラばかりだった。「ヒルデガルトは口を開かなかった。・・・あたかもそこにはいないかのように。死人のように息づかいさえ感じられなかった。」何か話をしないかとふってみたが、それでも彼女は話をしなかった。コカ・メディーナは、ヒルデガルトは「すべての抽象的な客観的な質問には興味がなさそうだ⁸⁹」と感じる。

Havelock Ellis Papers の1933年7月1日付けのキャサリン・ジレット・ギャティ (Katharine Gillett-Gatty)⁹⁰ からエリスへの手紙も、本当の著者が誰だったのかについて、一つの手がかりを与えている。ジレット・ギャティはアウローラとヒルデガルトをスヴェンガリとトリルビーになぞらえている。つまり、スヴェンガリたるアウローラが、トリルビーたるヒルデガルトを思いのままに操っていたということだ。ヒルデガルトは講演では、人々を引きつけたが、質疑応答になるとまったくダメだったという。ジレット・ギャティはヒルデガルトは「母親のディクタホン」だったと述べている。「彼女は賢かったが、経験不足で彼女の意見は、すべてがきちんと消化されないまま、飲み込まれたものだった。彼女のスピーチは、心地よい声で、愛くるしいゼスチャを交えて、あたかもダイニングルームの椅子で短い詞を暗誦する6歳から8歳くらいの子供のように、全く自信がなさそうだった。彼女は教えられたことを言っているだけだった。したがって質疑応答になるとうまく答えられなかった。」⁹¹

大学でヒルデガルトに教えていたフリアン・ベステイロは既に述べたように彼女が優秀だったことは認めているが、同時に「あまりに母親にべったりで、あたかもまだへその緒がついた

⁸⁷ Coca Medina, Gabriel, "Con la camarada Hildegart, propagandista de la rebeldía sexual de la juventud", *El Socialista*, 5-dic.-1931.

⁸⁸ Coca Madina, Gabriel, "Un parricidio intelectual en 1933 La muerte de la Virgen roja", *Tiempo de Historia*, 19-Junio-1976, p.41.

⁸⁹ *Ibid.*, p.42,

⁹⁰ Katharine Gillett-Gatty はシンクレアによれば、1920年代初頭に看護師としての訓練を受け、産婦人科で働いていた人物。Sinclair, *op.cit.*, p.145. おそらくは Crawford, Elizabeth, *The women's suffrage movement: a reference guide, 1866-1928*, Routledge, 2001. pp.241-242 に掲載されている Gatty, Katherine (1870-1952) ジャーナリストで女性権利運動家として紹介されている人物ではないかと思われる。そう考えれば、彼女がエリスへの手紙で「自分も年をとった」(この時点で63歳)と書いていたり、エリスへの手紙をパリヤムステルダムから書いていることも納得がいく。どのようにして母娘と知り合ったのかは今後解明して行く必要がある。

⁹¹ Letter to Ellis from Mrs. Katharine Gillett-Gatty 1/7/1933. Havelock Ellis Papers, folio 72.

ままのカンガルーの子供のようである」⁹²と懸念していた。

1933年4月5日付けの新聞「自由 (La Libertad)」にはヒルデガルトのインタビューが掲載されているが、そこでインタビュアーがこういった質問をしている「個人的なことをおたずねします。お母様も大変な反骨精神をお持ちでいらっしゃると思いますが、あなたのお考えはあなただけのものなののでしょうか？いつもご自分でお考えになるのですか？」ヒルデガルトは「ええ、記憶のある限り、私の考えはいつでも私のものです。」と答えている⁹³。こうした質問がされたということ自体、誰が本当の著者なのかを巡って、人々の間に疑問が抱かれていたことがうかがえる。

結びにかえて

アウローラは計画的に妊娠をし、「自分だけの」ヒルデガルトを手に入れた。そしてヒルデガルトに完璧な教育を施した。ヒルデガルトも母親の期待に十分に応えた。ヒルデガルトに英才教育を施し、いくつもの学位を取らせ、若い時から政治活動をさせ、当時のスペインで、若い女性に性の問題について執筆させたのも、アウローラの「プロデュース」だったと言える。

母親による娘殺しというセンセーショナルな事件が起こった1933年6月9日の少し前、1933年5月19日の「大地」紙には「カインとアベル」⁹⁴という記事が掲載されている。カインはアウローラ、そしてアベルはヒルデガルトである。この記事は事件の予告であり、また正当化でもある。ヒルデガルトの名前でサインがされているが、執筆したのは自分だったことをアウローラは、デ・グスマンとのインタビュー⁹⁵、及び、精神病院でのコメント⁹⁶で告白している。進歩の象徴であるカインは凡庸な存在であるアベルを殺す義務があるという内容である。これは言わば、母親が娘殺しを予告した文章としても読める。グスマンによれば、アウローラは「(この記事に)サインをすることで、ヒルデガルトは自分の死刑判決にサインをしたことになりませう。・・・ヒルデガルトの人生において私たち二人は精神的にとっても似通っていたので、言わば一心同体だったと言えます。」⁹⁷と語ったという。

スペインの新聞はヒルデガルト殺害のニュースを大きく報じた。殺害理由について様々な憶測が飛び交った。ヒルデガルトがアウローラの庇護下から出て、自分の人生を生き始めようと

⁹² Coca Medina, 1976, *op.cit.*

⁹³ Silverira-Armesto, Blanca. "Las mujeres de la República", *La Libertad*, 5-abril-1933, citado por Rosa Cal, *op.cit.*, p.97.

⁹⁴ Hildegart "Cain y Abel", *La Tierra*, 18-mayo-1933.

⁹⁵ De Guzmán, *op.cit.*, p.33.

⁹⁶ Rendueles, *op.cit.*, p.38.

⁹⁷ De Guzmán *op.cit.*, p.33.

した⁹⁸のが最大の理由だった。それまでの少女らしい三つ編みを切り落とした断髪姿でアクセサリーを身につけた象徴的なヒルデガルトの写真が残っている。これからは自分の人生を生きるのだというヒルデガルトの意志が現れているかのようである。

事件から一年後の1934年6月、裁判が行われた。アウローラは1時間以上に渡って自分の人生を語った⁹⁹。殺害はヒルデガルトに依頼されたからで、自分の行為を全く後悔していないとも述べている¹⁰⁰。

ヒルデガルトが死の直前まで執筆していた「大地」紙上では、エセキエル・エンデリスとエドゥアルド・デ・グスマンによる「ヒルデガルトの生と死のミステリー」と題された連載が始まる。エンデリスとデ・グスマンは刑務所のアウローラに面会に行き、話を聞いてシリーズを執筆した。この本が後に映画の原作にもなった『血のアウローラ』として出版される。

アウローラの裁判では精神異常があるかどうか争点となったが、結局、有罪判決¹⁰¹が出てアウローラは収監された。その後、1936年7月の内戦勃発の混乱のさなかに彼女の消息は途絶えてしまったとされていた¹⁰²。しかし実際にはアウローラは1935年末にマドリッド南方のシエンポスエロスにある精神病院に移送され、そこでアラ・サイス（Ara Sais 真実の祭壇という意味）と名前を変えて詩を書いたりした。精神病院の中で再びファランスティエールを作ろうとした。猫に愛情を注いでいたがその猫が死んでしまうと布で人形を作り始めた。アウローラの人形への執着はずっと続き、ついに勃起した性器を持った等身大の男性の人形を作るまでになった。アウローラは1955年末、シエンポスエロス精神病院で生涯を終えた¹⁰³。

アウローラとヒルデガルトという母娘はどちらかだけでは成り立たなかった。ヒルデガルトの誕生と人生は、アウローラがペピートを取り上げられた瞬間に運命づけられていたと言える。実際にタイプライターをたたいたのは誰かは別として、ヒルデガルトの「作品」は母娘の共同作品だったと考えられる。

1920年代から1933年までと短い期間ではあったが、スペインの人々の注目を浴びたヒルデガルトについて今後も研究を続けていきたい。今後の方向性は彼女と関わりを持った人々の視線からのヒルデガルト像の再構築である。カンボアモールやビクトリア・ケント、フェデリカ・モンセニュ、カルメン・デ・ブルゴスなど、新しいスペイン女性の一時代を築いた女性たちが

⁹⁸ ヒルデガルトが母親から独立したと考えた理由は、連邦共和党の政治家ベリジャ氏との恋愛、自由な政治活動への欲望、ヒルデガルトを母親から離そうとH.G.ウェルズやエリスが彼女をロンドンに呼ぼうとしたことなどである。

⁹⁹ Massa, Pedro, Epílogo de un crime sensacional, *Crónica*, 14-junio-1934.

¹⁰⁰ *Ibid.*

¹⁰¹ 1938年5月27日、懲役27年8ヶ月1日の判決が出た。

¹⁰² De Guzmán, *op.cit.*, p.199. エドゥアルド・デ・グスマンの著作がそのようになっていたので映画でもそう描かれている。

¹⁰³ Fajardo, José Manuel, “Un delirio redendor”, *Cambio* 16, N.806, 11-mayo-1987. pp.132-133.

らの視点、マラニョンなど WLSR の同僚たち、またハヴロック・エリスやマーガレット・サンガー、ノーマン・ヘアなど海外の性科学者などの評価などをもう少し様々な史料や文献をあたって明らかにするとともに、「実際の」作品の筆者は誰だったのかについてさらに検討してみたい。

本稿は平成 21 年度専修大学研究助成「20 世紀スペインのセクシュアリティの研究」の成果の一部である。